

遊川群集百景

27

特別

イ 4

3159

▲ 5

80

75

70

65

上野松坂屋から 飛降り自殺

日曜の日出最中大騒ぎ
二年越に死を探した男

廿一日午後四時二十分、谷區上野
廣小路松坂屋西階五階と六階と
の間高さ八十尺の階段室の窓から
突然一人の若い男が歩道目掛けて
飛降りベチャンコになつて人事
不省に陥つた、折衝日曜の日出で
大騒ぎ最中黒門町派出所の白鳥巡
査が駆けつけ松坂屋の店員と協力
して付近の松永病院にかつぎ込み
手筋を加へたが間もなく死した
右は富山縣水見郡熊無村生れ丸

山義正(三)といひ最近まで市外
大森不入斗松之湯の三助をし
てゐた者で廿日朝無断家出し行
方不明になつてゐたもので、遺
留品のバイブルの裏表紙に赤イ
ンキで「私は二年越に死に場所
を探してゐたが今日いよいよ決
心して死にます貴方にバイブル
を送ります」と従兄の芝區神谷
町二五四辻正一に遺書があつた
原因は前途を悲観した結果と見ら
れてゐる

怪談 今日の自殺者

清山天童



今日は昭和四年七月廿一日、午時五時
た。此の午時の時刻までも記する事に就ては、大
いに意氣がある。やがて午時は半過ぎ、何事か上野廣
小路松坂屋の表通りに仰つた何階目あるか、一人
の男が飛降りて死んだかゝる事がある。午時も時刻
すむと明記する必要があるてはないか、何も借が
本を地上に遺すまい中、何階下りのを覚えてはない

か

今年は入梅の時期から天気つらさ、梅雨より暑くて、人々はい〜とコボ〜と居つたのに、昨日は雨の川筋をとりおりに、雨天で少し冷しかったが、今日は晴後の雨晴れて朝の中は冷〜かつた、さよでも午後には雲晴れて(晴るすりも矢張り)昨日のさうに暑かった。今日は日曜日で、飯食ふ種の仕事を遠慮無く休んで、書齋にフ〜ソリ返つて休んで居たが、国民図書株式會社の孫給本「國歌大系」の第十九巻が配本に成つたので、開いて見るほど、~~華~~ねて見たいと思つて居た平賀

家

元義の書集があつたので、一氣呵成に上中下の三巻 頁を讀んだ、なるほど噂に聞いて居た吾妹(妹)子(子)とシ何れなとシ(と)あつて、おきも二つこの歌が大部分を占めて居る。中には五番所(所)在標の上での歌と、おらちねの母にこらけえの歌には、昔の真実さに全く驚かされた。それおら改(改)社の怪談全集(中)貫太郎作のを買つたばかりで、また(又)暇がなくて(読)まうからたのを讀んだ、人犬記とりよのを見ては狂犬病になるには時間が早すぎるとのび(び)は痛(痛)理(理)又(又)於(於)いては素人を平と思つたり

又水郷異聞にも際常炎にありにはあまり早也す
 ことおもつたり大分無理な記事もあつたが、鬼に
 街大分魅入られて来た、此頃は丈低の作物には
 此味が豊くあつて居る僕にしても、五回十頁か
 らの本の三分一ばかりは一葉何成に讀ませぬと
 ころを足るは、鬼に尙面向い讀ませぬと言ふ物は
 ならぬ。それと云つてはない、僕の胸にさしかる
 一種の不思議な豫感でもりよやうなものか強いた。
 そればかりである、午後の三時半頃、此の暑い日
 中に外に出た、あつた、あつて己とりあつても何
 か一つ怪談を見て来るとかと思つた。怪談と云ふ

ものは、さうあつたに無い、又さらにあつたは怪談
 には無いと常日頃友人にもつて居る僕が、か
 りよ集になつたのが己に怪談でもあつたか、鬼
 に尙外に出た、併し有りやうは、また怪談三味に
 は平らなつた、とりよのは、出た次見物、手に
 茶を買つて来た、と準備した位である。僕は上
 野の廣小紙の栗田園を買つたので、木を籠に三
 分の一ほどあつたが、出たついでと男が半斤を、
 それがうさつて三味に平らなつたのは、つ
 いでに葉書を一つ書りて、知人の勝崎雪風氏に出

し、それは僕^の所持の芭蕉の遺物たる鐵如意を
 帶冠宗匠が寫真に取りに寫真師を向けるとし、その
 とき、喜いと、それから汗ダクで来た、寫真師を氣の
 毒に思つて、此方から行く時持~~て~~、かゝる返
 事して遣つたのである。こんなやつて行く事は今
 月の怪談に結ぶつける事では無いが、三味でなか
 つた證據もなしに、いのである。
 怪談見物

外に出た、筆物、素足、扇子一本、スライキ一
 本、帽子、羽織^の、茶を包む風呂敷一枚（元
 は去りの中元に岩波書店から貰つたもの）を懐にい
 て、葉書は三馬でポストに入れた、僕の住居は法
 寺

問題である

中初音所である、~~事~~渡部治右衛門の邸宅、紅葉が
 澤山ある、うら紅葉敷といはれ、居る所も通つた、
 左側は家並で、そこに見事な松樹を軒下に植ゑて
 居る、善通の家がある、氣が少し、いつもやり、笑いて
 居つた、僕は松樹は大好きだが、善通がつくだけ、
 その氣が嫌いなので、そなたにも、善通に、お水が、善
 くから、青い氣を見て通つた、怪談はない、そなた
 が、善通に成つたか、成功する、ならうといつても思つ
 て居る洋服屋の前を通つた、其所は今ほど、なにか
 二三年前、その家の前を通つた、善通紙で捲いた

人形とんぼに、
 一たりする人形を燈火に照して居るが、子供が見
 ては一人では恐^{こわ}かつたものだ、そのころ銀舌の木
 を鉢植にして、あざと枝を少し長く印^{いん}をつけて、
 じやみに丈^{せう}ばかり延びさせて、見るものを一
 寸動かして居る、何かすすり羨つた頭^{あたま}を持つて居る
 主人に相違ない、その水で僕は前^{まへ}から此所の主
 人は、因^{いん}宗家の頭腦の人だと相像して居る。併し
 洋服の仕立は上手か下手か分らぬ。此所でも怪
 談は無かつた、その水で常林寺と少し手にぶつかつ
 て右の暗い坂を下りかけた中道から又左の間道を
 通つて、
 中道所の
 寺の境内を抜け道し

て、清水町に出で、何人ともかり小箱荷様の境内に
 居る
 とり小鑢師であり且つ刀剣の鑑定で
 ある人の家の下を通つて、僕の口持つて居る刀も
 一度は鑑定して貰つて置かうかと、胸のみに
 一たり、其の力は寛永頃の本阿彌光^{あやみつね}温^{ぬる}かつたか
 が相川正宗と鞘に鑑定書さして居るが、今度鑑定
 せざるなり、鞘を拵つて、本阿彌の鑑定を見せな
 いで見せ貰ふ事に仕様なと思つたり、實は正宗
 であるが、流のものでも羨いから別人であつて
 是れはよいかと思つたり、本阿彌を信用しない

誤ては異いか 鏡へては正守の存在を疑はれ
る位だから、却つて別人だと其の所持のものと
してあるては、信用があるといふものだと思つた
り、又その鑑造家の向の家は嘗て鈴木清美といふ
人が住んで居つて、その人が短銃で自殺したとい
ふ話を聞いた事があるといふ事、何となく懐かしい
くも悪い事を考へたり、上野公園の動物園の裏門
の前を通り、東照宮下の電車線路に出て、左右の
ら来た電車の間を態とでもあつたに悠然と通
り、いつしこつて待つたものだから、乗る必要の無
い時に左右から来たあつたといふ、イヤもの短銃を胸
に突き刺さり、目のカフと眼、苦痛が水無月土

用次第の巻末をみて思はず池畔に出た。池畔は
ペリヤには二三人が腰あけて居た。田中五郎
氏の怪談全集のやうであらば、是れとも青い男
女が肩をくつつけて並んで居る。さうだが、若い
女が一人のペリヤと、学生風の男が二人一組と、
労働者の風者が一人居つた事ゆゑ、男女の志の
さうやまなとは一組も違つた、尤も志のさうや
まは違つたが、違ひはなほある事と思
ふと同事に、先刻が平賀元義の「たうらぬの
母にころばえ夜」は妹と我は書こ逢ひけれ

といふ教をみりし出したり、唐の道に出るは
 己が東京に出、てから三十坪になつたのに、市中に出
 る度に、どこかて道路の普請をして居ないのを見
 た事が無いとおもつて、もつとも今降んに廣く
 道普請をして居るて歩くに困難な位だから、か
 りと思ふのも我ながら無理は無い、と思つたり、亦
 市役所の土木係りの御役人も大抵でないやと思つ
 たり、併しそれで飯を食つて居るのだから、御つ
 てもつけの事なら、と思つたり、己が秦の始皇の
 らは、一撃して永久的の普請するがなと、ト云ふ
 カの考へをしり、己が考へは秦の始皇のやう
 にと思ふところを、栗田園で三圍の榮を半

僕

斤買つた。百は實は頑固な性格で、容易に習慣を
 改め得ないの、今や今日に成つて何斤などと言
 つて居るが、實に一斤は何處に當るのか知らない
 のである。

その茶包を以て里門の長樂とりよ、西洋料
 理もすべし、支那料理も出来るところが、はいつた。
 はいり懸けを見つと、入口の客待顔に女給が一人
 居つた、その女の顔が、僕の性來の好みと反對
 に出て居るの、はいり懸けから仕舞つたと思
 つた、何も露女庵に來たので無いから、女給の顔

か美からうか美からうか、物踏さし美けは美
 いのである、そして見ると、僕も此のやに成つて
 己惚が無いつしりだが、自白すると、まあ何處か
 に色氣があるなと思つた。暑いぢやありませんか
 (素)とか、ずんとか、餘計な事を愛々に言ひ
 ると、卻つて積にさあつて、此の女も此のやで居
 るから、己が嫌うて居るのは、どこか眼色で自分
 りさうなものだ、と思つて見たり、かゝりお野暮
 の老を出しまいと、自分を責めて見たり、どうし
 てか己は慥實だらうと思つたり、うんも矢意
 から来たにがこだと思つたり、神経衰弱の筆味の
 ある事は自分でも自覺して居るが、昨今からの

筆で無いぢけに、才二の性積と成つて、今更直さ
 うにも直るまいと思つたり、そこで一圓五十銭の
 かの安い方の定食を命じて、曹達水を一ツ呑みも
 のに取つて、一円七十銭の勘定に二圓を遣つて
 千リをねらすにさつさと其所を出て、いやまゝあ
 る、僕は材料屋をたべて居る時だつた、二階
 から下りて来た女絵がある、その女は前がりのより
 一層若いやな女であつた、此の女に叩こらぬら、
 思ひ印つてはいらぬやらのを、あまがつて出たの
 かも知れない、暫らくすると、又一人女絵が二階

たり、併しその女は年が次ぎを十八九で、最も若く
 見えるやうに纏つて居るのい實のところは二十四
 五位かも知れぬ。夫に尚あさり若いので借らんど
 が、厭をいふ相手とすべし、ものでは無い、併し借
 の一瞥が、前の女に向けられたものと愛つて居たも
 の、見え、ものと見えでは無い、確に違つて居る
 事は本人自ら知つて居る。世に、世にかあるぬか、その
 女が、僕の前に来て、い、それが通するものと見えて
 了く、ソヤリ、では無い、簡單だが、實に要
 領を得た御世辭を言つた、爰にその要領を得た
 と、いふ條件を呈出したいが、それが要領を得た

御世辭、と、世馴れた諸君に笑はれては恥ぢから
 せん、は抜きにする。夏
 その時、たつた、外は未だ日日の炎威盛んで、ワ
 かとク、ソ、ソ、と、暇を尋、一、其女と話、合つて
 居るても良かったのだが、そこが怪談か、此時は
 誰れも、家から覚悟して来た怪談、物か、一、つ、か
 り、遠く、なつて、世には、か、うも、其の、好、い、な、女、も、あ、れ
 ば、い、好、い、ぬ、女、も、あ、る、も、の、か、い、それ、こ、を、羨、い、の、な
 誰、も、彼、も、好、い、な、ら、昔、年、の、や、う、な、女、が、い、た、か、、世、の
 中、に、奸、淫、疑、ぎ、か、と、う、一、も、多、い、道、徳、を、思、つ、た

か、自分は突如茶包を持って立上り、さき急いで
 勘定を拂つて、水魚月澄の宮立をあらう
 炎天而も首都の廣小路の真榊標に出た、獲せ
 三 間あき出ると、後の方で、ぬいた女の聲で、
 線の方の活潑な響動、どうしてせう、大分の平
 懐好なり」といつた、二杯を要領を得た御
 世辭の一つとして置かす。先刻茶を買つた都の
 都の山崎といふ油屋の前に来た、怪談は呉こい
 ふ真晝間に起つた。
 と向ふを見ると、松坂屋の表通りを女學生が
 二人歩行して居る。静かである丁度頭の上で、松坂屋

股)

の何階かは知らぬが、更に南三階以上は何か大
 きなものぞ投げつけたものかある、地上に落ち、
 と同時に、ビタリと地響きした。女學生二人は幸
 に當らないうちに、商人が、僕はその時騒動な
 をするものか、いそ人が通した何ぞ投げつけた
 のかと思つた、そして御徒町の驛より省線電
 車に乗り、目善里の驛に下車して帰宅すべく、
 廣小路の市電線路を越えて松坂屋の前に進入し、
 そとには大の男踏みか頭を西に仰向けさま
 に両膝を擦げ、剃禿禿の真新らしきを見せ

から

大の字なりし怪中居る 着物の氣の逆折りし
 足袋裸足で、柄の大きい大り肉の、両股は真白
 て、兎に箇日に曝され生草の若て無い事は今
 る、この事事は明朝の新聞に何處の誰といふ
 事^{まで}も知れずであらうが、今即時に記載すれば
 か、書くが外は無い、其時は女學生は無言で
 二人が後振り返つて見て居たが、人だか
 りし、巡査が駆けつけたのは見えなかつた、
 萬世橋の方にあき去つたのである。さうさうい
 たる事であらう、さうして此の事件をいつ早く
 見た者は、僕とその女學生二人であらう、而
 も船の下りる中途、未だ地上に達しないのを

見た者は僕一人であらう。怪を認めは怪來る、
 怪談を見よと思つて外に出た僕は、世に有り
 得る事とはいひ、未だ強気な大の男が、白晝(白
 晝は夜と異つて人の性態も表かすものである)に
 船の下り自殺するやんとは怪談といはぬはなぬ。
 いや、四年五十年後の怪談を集めて、その怪談の
 原因も、多くは一朝一夕の事柄で無い事であ
 る。今日の自殺者の事情を調ふなるといふ悲
 慘な事からみなくては居るか知らぬ。 ~~疾~~
 関係か金銭問題か、その金銭の要不要も、

多くは疾情関係がわらうと云うのが多い
 先は箇今りの自殺者の落りに廻向(せう)
 南無阿彌陀佛

一、年俾(としとせ)の女給(にょく)にも景色(しきせ)気味(きみ)は出(で)ず
 い、年俾(としとせ)も無く
 歳甲(としがら)

微書(みづかき)也

海の岸より舟ありて浦遠
く杉の木末の緑のみ見え